

しまったかな？

公園新聞

「そろそろ起きようよ。朝の日差しが一杯だよ。ねえ、まだ寝てるつもり……。ウーン。寝るんならひつついちゃうから……。よいしょと。」

どすん。そんな時、ノイは自分のベットから移動して来ると、わざと乱暴に、寝ているふたりに身体をぶつけるようにして、われわれのベットに身を伏せる。

休日の朝、甘い寝覚めの感触を楽しんでいるふたりを、なんとか寝床から引っ張り出そうとの作戦である。それでも、ふたりが執念深く寝ていると、それ以上の行動に出ることがないのが良いところ。

「ウーン。まだ寝てら……。むにやむにや。」

そのうち、自分もひと寝入り。

「あ、やっと起きた！ 良かった！。おトイレ行って新聞取って来るんでしょ。」
ブルブルブルン。

庭を一回りして、用を足したノイは、女房殿にご催促。

「あーさごはん、朝ご飯と。早く行こう。こっちこっち台所。」

遅い朝食の後、春めいてきた日差しの中で、のんびりと新聞に隅々まで目を通す。紫煙とともに時はゆっくり流れてゆく。しかし、まてよ、それがささやかな至福の時間に感じられるのは、当方が老いたせいに違いない。うぬ、これで良いのかな？

考えてみると、ついこの前までは、知らない人の死亡記事なんて、熱心に読んでなかった気がするけれど……。最近は四十台だ、若いのか、心不全・急性肺炎なんて病名で片付けられてる死因が、心に引っ掛かる。若い頃は、新聞の読み方も今とは随分違ってた。こりゃいかん。

「気分転換、ノイノイ、散歩行こうか？」

「はいはい、賛成。大賛成。」

トッコントッコン、トコトコトン。最近は階段を下りるノイの足音も、ゆっくりと慎重である。光陰矢の如しとは言うけれど、ノイもすでに、十歳を越えている。グダグダと階段を一気に昇り降りした足音が懐かしい。これには少しだけ？デブになり過ぎたせいもあるか……。ダイエツトしよう。あれ、むこう向いちゃった。

「なになに……。ふむふむ……。なるほどね。納得。」

「おや、あ奴が昨日は来たんだな。奴も元氣らしいな。」

公園に着くと、リードを離れたノイは、木漏れ日の林に入り、地面に鼻面を近付けて、新聞

を読み始める。ノイが公園の芝生であちらこちら熱心に匂いを嗅いでいるのを見て、リーディング・ザ・ニュースペーパーと、居合わせたアメリカ人が表現したけれど、まさしくそれは的確な表現であるようだ。ノイのクンクンふむふむは、日毎に熱心になるような気がしてきた。ノイの新聞は、公園中が紙面である。

咲きだしたタンポポの、軟らかそうな葉の先で、ノイは、前足を片一方だけ宙に持ち上げ折り曲げる、ゆるゆる尻尾が揺れている。面白い記事でも見付けたいらしい。ピンクの舌がちよつと覗いて、振り向いたお目々が笑っている。

「クンクンクン。クン・・・ハックション！」

講読料がいらぬ代わり、熱心に読み過ぎるとクシヤミが出るのが、ノイの新聞の特色である。

中には面白くない記事もあるらしく、そんな時には、肩の辺りと尻尾の付け根の毛がピンと立つ。時には、腰を屈めてちよろつと、自分でも記事を書き付ける。

「ノイノイ、なんて書いたの？」

「あら、見てたのね！ な・い・しよ。」

欧米の公園に較べれば、日本の公園は「犬、入れない」なんて所が多くて、税金はアベックのために払ってるんじゃないぜと言いたくなるけれど、犬連れは、それだけに気を遣って、

用を足した後の始末をきちんとして行く人が多いから、あまり不愉快な思いはしないで済むけれど、中には不届きな飼い主もいるようで、嗅覚優れたノイは、時に立体的な記事を発見することになる。そしてまた、ノイはよくこれを見付けてくれる！

「だめだめ！ 汚ない。あっち行ってなさい。まったくもうけしからん！ 心ない飼い主のせいで、全部の犬の肩身が狭くなる！ 犬が可愛いけりや、責任を持ってっつんだ！」

ぶつぶつ言いながら、こちらは冷たくなったよその子の後始末をする羽目になる。健康状態のチェックをしながら、家の子の後始末をするのに苦痛を覚える愛犬家はいないと想うけれど、誰も知らぬよその子の物となると、話は別である。たまたま、させっぱなしで立ち去ろうとする現場に出くわした時には、ビニール袋を差し出して注意するが、その反応もまちまちである。いつも始末用具を持っていない人、そのために清掃係がいるんじゃないかとのたまう人、etc。こちらも歳のせいか、いちいち腹を立てるのはやめにしたが、食べ散らかした弁当がらや、缶ジュースを平気でほったらかして、楽しそうに帰って行く親子連れを見ると、やっぱり世の中、教育が間違っているのではないかと、考え込まざるをえない。楽しい散歩が興醒めだ。

ロンドンやパリの街中では、スクーターでそれを始末して回る清掃人を見た。道路の側溝も、それ用に工夫して作られている通りもある。しかし、清掃係より犬の数のほうが多いせい

だろう、踏まないで歩く注意は欠かせない。ハイドパークの芝生は、冬でも緑が美しく延々と広がっているが、芝生の中で大の字にひっくり返って曇天の空を仰ごう、なんて想いはゆめゆめ実行しない方がよい。もちろん「芝生には入らないでください」なんて、野暮な注意書きはどこにもないから、人間が芝生で日向ぼっこをしようと、昼寝をしようと自由である。グニャリとした、あれの上に位置してしまうことさえ恐れなければなのであるが……。犬たちはリードを離れ、のびのびと緑の芝生を駆け回る。騾のよい犬しか公共の場所には来ないから、飼い主が呼べばすぐ駆け戻って行くし、犬同士の争いも見ることがない。一方、人間たちは芝生を横切るのに、けもの道ならぬ、細く踏み分けられた人道を、一列になって抜けて行く。踏み付けてしまわないための、安全策である。

シャンゼリーゼの並木路も、はらはら散る黄葉や撃しい焼き栗の匂いばかりに心奪われては、歩けない。昨年訪れたときには、シャンゼリーゼ通りの脇の公園は、金網で囲われ、入場無料ながら、出入口にはドアが付き、犬だめマークがでかかど掲げられていた。残念なことだと言わざるを得ない。

ニューヨークのセントラルパークを歩いていると、さまざまな種類のワンちゃんたちが、これまたさまざまな人々と散歩しているのを見ることが出来る。グレートデンからチワワまで、みんなうれしそうに歩いている。さすがアメリカ、犬だめーなんて言わないけれど、させっぱ

なしで放置した場合は、たしか二百ドルだったと思うけれど、高額の罰金を科す、という注意書きが至る所にぶら下がっていた。そしてまた、現物もあちらこちらに転がっていた。セントラルパークが、パリの公園の二の舞にならないことを願うのみである。

ワイキキをはじめとする、ハワイのリゾート海岸は、犬の連れ込みご法度と聞いて、なんでもとは思っけれど、一面では飼い主の責任でもある部分が少ないだろう。

ノイが、また、桜の木の下で新聞を読んでいる。ノイが見聞を広げる妨げをするつもりはさらさらないのだけれど、当方が、いささか心配するのは様々な怖い伝染病。前にも書いたけれど、いろんな病原菌や寄生虫などの卵は、排泄物に混じって排出され、乾燥して、クンクンやる子の鼻から吸い込まれたり、手足の裏から体内に潜入したりもするはずだ。ノイの新聞は、その意味で大変危険な新聞である。ノイにマスクをかけさせるわけにもいかないし・・

。。新聞の読み方も、当方に似て歳のせいかな、最近はやけに丁寧になってきた。ノイは公園で、猫ちゃんや小鳥たちに、目と鼻の先で遭遇しても、「やあ、いたの。」程度で知らん顔。

土鳩が道を塞いでいれば、迂回して通る癖に、最近は公園の小鳥たちの臭跡まで追っている。鳩の排泄物には、人間にもこわい脳炎をもたらす何かが含まれていることがある、という話を聞いた気がするぞ。

「それは鳥のだよ、ばっちいよ！ だーめ！」

それでもノイは、腰を屈めてちよんと匂い付け。

若い頃のノイは、公園に行くイコール、一緒に走ろう、ボール取りしよう、フリスビー投げて・・・とスポーツ万能型。新聞には、ちらりちらりと目をくれるだけ。いつものコースを、首をすくともたげての、トロットだった。その頃のノイの行動は、どうも、視力に頼るところさぶる大であったようだ。自由行動の途中、ノイに気付かれないように、ひよいと木陰に身を隠して様子を見ていると、一緒に散歩に来たはずのふたりの姿が消えたことに、はっと気づいて振り向いたノイは、慌てて首をもたげ、キヨロキヨロと辺りを見回し、しばし、途方に暮れたような顔をする。

「見えないや。ちえ！、しようがないなあ。ちょっと目を離すとすぐこれなんだから・・・
連れに行つてこようっと。」

ノイは、一目散に今来た方向に駆け戻る。

「やっぱり居ないや。どこ行っちゃったのさ・・・！ わたし、隠れんぼ好きじゃない。
どこ、どこ、どこなのよ。」

キヨロキヨロ、キヨロ。クーン。

「あつ、そうだった。クンクンクン。わたしにゃ、お鼻があったんだ。クンクンクン。なんだ、こんな所に隠れたのね。ふたりとも見つけ！」

古今の学者の説によれば、犬の嗅覚は人間の一千倍ともいわれるとおり、ノイが嗅覚を使うことに気付いた途端に、われわれの隠れんぼはたちまち終了となる。数回の隠れんぼで、ノイは、すぐに鼻を使うことに気がついてしまったから、ふたりとノイの隠れんぼは、ゲームとして成立しなくなった。

せっかく持って生まれた才能を、延ばしてやるのも良いのかな、なんて考えたのが失敗だったのかも知れない。ノイが新聞大好きになった原因は、今から考えると嗅覚訓練の副産物である可能性が強いからだ。

その頃、あっさり簡単にトレーニング・チャンピオンの試験に合格してしまったノイが、訓練師さんの勧めに従って、次にチャレンジしたカリキュラムは、GD（ガードドック）の嗅覚訓練。

ノイは、後ろ向きにお座りをして待っている。その間に訓練師さんは、林の中をジグザグ行進。見えない所で、枯れ葉の中に何かを隠す。ノイの鼻に、同じ匂いがかがす。

「なーに。同じ匂いのする物、持ってくればいいの？」

行けの合図で、ノイは、低く首を垂れ鼻面を地面に近付けて、訓練師さんの歩いた通りの跡を、ジグザグに追って行く。靴を覆いた人間の歩いた跡に、いか程の臭跡が残るものなのだろうか、犬ならぬ身の知る由もないが、ノイのクンクンクンは、正確に訓練師さんの行跡をた

どって、林の中を抜けて行く。目的物を枯れ葉の中から掘り出してくわえると、ノイは、尻尾を振り振り一目散に駆け戻る。得意満面、嬉しそうな顔である。

「こんなの、かーんたん。はい。」

これは今でも百発百中、ふたりが隠しに行っても、すぐ見付ける。

「わー、すごいなあ。よくわかったね。偉いねえ！」

褒められるの大好きなノイは、訓練というより、これをゲームとして楽しんでいたようである。臭覚訓練は、いろんなバリエーションで進んでいった。さらし木綿や割箸・封筒・ビニール片などに付けられた「匂いの選別、持来。」

「これだと思っただけど、ねえ、どうしよう。教えてよ。教えてくれないの・・・？ じゃ、これにしちやおう。」

競技会の日、物によっては多少不安げな顔付きで、おずおず持つて来ることもあったけれど、

「合ってるって！ よかったね！」

正解と知らされれば、びよんびよん跳ね跳ねの大喜び。審査員も笑いだすほどの喜びように、当時は、他の面に気が回らなかったのである。臭跡追求訓練も、ノイはすぐに卒業したけれど、匂いを選別する面白さを、どうやら彼女はこのとき知ってしまったらしい。

臭跡追求のお勉強をしても、お散歩のときはクンクンの練習をさせなければよかったのかも知れない。いろんな匂いを嗅ぎ分ける術を身に付けたノイは、こちらの心配をよそに、今日もせつせと公園新聞を読んでいる。

その代わり、どこかで落とした手袋も、探して来ての一言で、たちまち尻尾振り振り見付け出し、くわえて来てはくれるけれど……。

からす

何はともあれ、公園はノイのお気に入り。十年も通っているから、どこがどうなっているのか、隅から隅まで知っている。

「あそことあそこに水道があつて、あそことあそこはわたしのトイレ。あそこに着いたら一休みしてピクニック。ねえ、今日は忘れないで持って来たでしょうね、ビスケット。さ、食べよう。」

自分に都合の良いことは特にだが、新しいこともすぐに毎日の生活パターンに組み込んでしまふのが得意なノイは、一度散歩の途中で、ポケットに入っていたビスケットと一緒に食べた場所を忘れない。公園の林の中の小道を外れ、落ち葉の散り敷く日溜りである。そこにさしかかると、ノイは新聞を読むのをやめ、きりっと首を持ち上げて正常歩。こちらの顔を時々見上

げて、鼻先で上着の裾をチョンと突く。期待に満ちたあどけない表情に、いつも、つい負けてしまうこちらが悪いのだが、何時の日からか、ノイのお散歩にピクニックタイムが取り入れられてしまった。ただでさえ、効率の良い栄養吸収機関を備えたラブラドルは、すぐ肥る。夜風に吹かれながら、絶えず身边に警戒のアンテナを張り巡らせている子と違って、ムートンのベットのうえでお腹丸出し、お化けだぞーの格好で、のんびり寝ているノイは、それだけ神経もエネルギーも消耗が少ないわけで、しらがも少ないかわりに、デブになる。若い頃と違って、トロットでの公園巡りも、全速力でのボール取りジャンプも、今は昔のノイにとって、間食はできるだけ避けることが望ましい。と、わかり切ってはいるのだが、健康に悪いと思いがながら、発明者のインディアンを呪いしつつも煙草を止められない当方は、ノイのお散歩アンド一休みピクニックタイムのパターンに引き込まれる。しかたがないから、甘かったり、辛かったり、油分の強かったりするスナック類ではなく、ドッグフードを散歩の袋に忍ばせるようになった。

チョンチョンチョン、ハーハーハー。ピンクの舌を覗かせて、ノイは、今日もこちらの顔を振り仰ぐ。木漏れ日が、ノイの黒毛を艶やかに輝かせ、落ち葉の下から顔を覗かせ始めた野生のスマイレの小さなブルーを照らしている。やっと春だ。しかし、ノイの現在の歡心は、もっぱら食欲。

「着いたよ、着いたよ。ここら辺にしよ。さあ、頂戴。」

カリカリゴツクン。カリカリカリ。手のひらに載せたフードをノイは美味しそうに飲み下す。ノイの辞書に、食欲不進という言葉はないらしい。

女房殿とノイだけで行くお散歩でない限り、散歩に“一休みカリカリ”のバターが定着してしまった感があるが、これを楽しみに待っているのは、ノイばかりではなかったのである。

ノイという音にはフランス語で黒いという意味が含まれるけれど、黒い同士で気になるのか、散歩に行くと、いつも枝の上から、ノイの行動を目で追っていたカラスの夫婦が、ある日、ついにたまりかねて地面に降りてきた。ノイは、本来ガンドック、水獺犬の部類だけれど、鳥類を追い掛け回す趣味はない。幼犬の頃、一回だけ、鼻先に舞い降りた鳩にじやれて突進したが、ひらりと舞い上がってしまった姿を呆然と見上げ、すぐすぐ戻ってきたとき以来、鳥たちに構うのは一切やめにしたらしい。カラスの方も、同色のノイに敵意を感じないのか、ノイの動きを気にしつつも、ビョコビョコ二本足で跳ねながら、目と鼻の先までやって来て首を振る。よく見ると、真っ黒な目は可愛く澄んでいる。

「ひとつ下さい、お供します。」

とは言わなかったけれど、ドッグフードを一握り蒔いてやる。ノイは、カリカリを休んで、暫しカラスの観察タイム。

「あんれ、あ奴もこれ食べんのかな？ あ、どっかへ持ってった。枯れ葉の下に隠してら。れれ、隠し終わったらまた来たよ。もっと頂戴っていつてるわよ。わたしにも頂戴。」

ノイは、カラスのために地面に置かれたフードに、一瞥を与えるだけで、自分を取りに行こうとすることはしない。あれだけ熱心にククン新聞を読んでいるノイの嗅覚は、カラスが、せがんで貰ったフードを口に満載しては、せっせせっせと運んで行っては隠してくる、数箇所はあるらしい枯れ葉の下のカラスの宝物庫を、読み解いていないはずはないのだけれど、ノイはフードを掘り出すこともない。喰いしん坊NOIだけれど、ひとが貰ったものはひとの物という倫理観念が、カラスに対してもすっかり働いているらしい。その代わり、カラスにあげるんなら、わたしにも頂戴の催促だけは忘れない。

以来、そのカラス夫婦がエリヤにしている林の中の散歩は、黒いのが、一つは地上を、跡を追う二つが空中を、時には頭上すれすれにもつれ合いながら、移動という構図になった。

「ねえ、あのカラスたち、この頃良いフード食べてるから、毛艶がよくなっちゃったんじゃない。でも、やめてよね。怖いから。」

意地悪した人間たちを覚えていて、空中から太い嘴で、頭を突いて行く、カラスの攻撃のニュースが時々報じられる。公園で、ノイと友達になったカラスたちは、そんな悪さをしないとと思うけれど、当方、女房殿にまたまた叱られる羽目に陥ってしまったのである。

家出

「先生……、可哀相な子がいるんだけど……。」

その夜の一件は、T夫人の電話で始まった。世にいう華の金曜日、時計を見るとすでに十時を回っている。聞けば、この寒空に駅前の交番の外に繋がれているラブラドルを見かけたという知らせが入ったとのこと。どうやら迷子のようなのである。

Tさんのお家のラブラドル、ソニアちゃんは、床暖房も入った南向きのお部屋に、天涯付きのぬくぬくベットで暮らしている。祖先は北の国から来たといっても、人間と一緒に暮らしているラブラドルは、綿毛もあんまり密集していないから、結構寒がり屋さんが多い。人間より体温が二〜三度高いから、さもありませんかと思う節もないのではないのだが……。毛皮をしっかり着込んでいても、身体を動かさずにじっとして居ると寒くなるらしい。ヒーターの前で温風にひげをそよがせて心地よさそうにしている子なんかを見ると、可笑しくなってしまうけれど、暑さ寒さを感じる温度は我々とたいして違わない。

二月初旬の晴れた夜空は寒気も厳しい。水割りの心地よい酔いも一気に醒める。

「この寒空に外に繋がれればなしなんて、ほんとけない！」

「飼い主が見つからないときは、保健所行き……。」

交番のお巡りさんのせりふが、耳にこだまする。

「こんな夜中に、何処へ行くんだ・・・？」

ご主人の声を背中で聞いて飛び出してきたT夫人と、交番から十二時過ぎになって本署へ回されたという、問題のラブちゃんに逢いに行く。飼い主が見つかるまで、とにかく少しでもよい環境においてやらなければ、の思いである。鑑札が首輪に着いているから、役所が開けばお家もきつと見つかるだろう。名前も「しよーた」と書いてある。残念ながら、電話番号は書いてない。今日はすでに土曜で、明日は日曜。警察でも役所関係の問い合わせ捜査は月曜日になるようだ。

「いやあ、引き取っていただけますか。助かります。大きな犬だし、署に置いておくと辺りの家から苦情も出るので。」

ラブドール種についてよく知らないらしい警官は、図体の大きな「しよーた」の扱いに、戸惑っていた風情である。

それでも、本署ではちゃんと屋根のあるところへ毛布を敷いてくれてあり、第一発見者が貸してくれたというリードに繋がれた「しよーた」は、途方に暮れたしよぼくれ顔。眼前にはお水もドックフードも置いてくれてある。お水はバケツ、フードはクツキーの缶の蓋の上ではあったけれども・・・。

「この犬は何歳くらいでしょう。」

警官の質問に、「しょーた」君とじっくり対面。肋骨が浮いて見えるほど痩せているけれど、骨太で親から受け継いだ形質はよいようだ。お顔も分別をわきまえた遠慮顔。見知らぬわれわれに、注意深い観察を働かせながらも、お目々はさすがのように見上げている。

「すみません。お力お貸しくださいます。。。」

弱々しく揺れる尻尾の先は、そう言っている。どう見ても、すっとなんかの若さではない。

「七歳。。。くらい、だと思えますが。。。」

正確なところはわからない。可愛がられている限り、この歳のラブラドルが、街中で保護されることはないはずなのだ。頼んでも家出なんかしてくれないのが、普通のラブラドルである。

Tさんのお宅のソニアちゃんは、女の子でちょうどシーズン中、しょーた君をつれて行くのは具合が悪い。Tさんは犬大好きなお友達Nさんのお家を、預かり先として手配済み。もちろん、暖かいお家の中においてくれる家。

「いくら何でもこれは汚れ過ぎ。いきなり連れて行って、うとまれたのではかわいそう。」

「しょーた、お風呂入ろうぜ！」

「あらあら、これからお風呂なの！」

寝ていた女房殿も起き出してくる。ラブラドルに関わることは、見ないふりして棄てては

おけぬ……。

お鼻の先から尻尾の先まで、しよーたは気持ちよさそうに洗わせる。シャンプーしながらついでに点検。パットの裏が仔犬のように軟らかい。これはお散歩にあまり連れて行って貰えていない証拠。筋肉も薄い。「犬を見れば飼主の扱いが分かる」のは、「こどもを見れば親が分かる」のと同じである。

幸いどこにも怪我はない。

「お鼻にお湯、入らないようにしてね。」

と言うところは、ノイと同じである。風邪をひかせては一大事、脱衣場で荒拭きし、二階に上げてタオルケットを払げて、仕上げ拭き、

「ここんち、何だか、待遇、良いみたい。」

良い子ちゃんでお風呂に入ったご褒美のチーズに、満足顔が笑っている。

緊張がほぐれてきたのか、しよーたは、拭いている途中から、女房殿に向かって子犬のようにじゃれ噛みを始める。シャンプーの香りが辺りを満たす。

「こんなじゃれ方するところを見ると、本当はもっと若いのかな？」

ムニユムニユをめぐってお口を見れば、歯も白い。しよぼくれ顔があどけない表情に変わると、若々しさも増してくる。どうやら、素直な性格であるらしい。

「四歳か五歳くらいかなあ……。」

Tさんと、ふたりは、汚れを落とし本来の毛色を取り戻したチヨクラブ君を前にして、首を捻る。預かってくださるNさんのお家も、首を長くして待っている。考え込んでる暇はない。

警察署からの車では、ワゴン車の後で神妙にしていた癖に、今度は後の座席をヒヨイと乗り越えて、運転席にお鼻の先が伸びてくる。

暖かく迎えられたNさんのお宅。用意されたふわふわクッションの上に、遠慮がちに身を伏せる。誰かが食べ物に手を出すと、

「それ、僕にも食べられる？」

と、擦り寄ってくる食いしん坊には違いないけれど、その食物がいつばいあるお台所には、入ろうとしない。後足は外に残って、首だけくんくん伸びている。「いいよ。」と言っても入らない。どうやら、この子も自分の倫理観念を構築している子ようだ。これなら何とかなるだろう。

「さあ、お寝んねの時間だよ。」

Nさんが用意しておいてくれたフワフワクッションに「しよーた」を寝かせ、ふたりが家へ戻って、再びベットに潜り込んだのは、すでに三時に近かった。

たった三日間、Nさんのお宅にご厄介になっただけなのに、公園の犬連れ仲間には、「迷子の

チヨクラブしよーた」はたちまち記憶された、Nさんが、お散歩大好きしよーた君をいとおし
み、多忙な時間を割いては、毎日、公園に連れて行ったからである。万が一、来たばかりのN
さんのお宅を見失い、しよーた君がそこら辺りをうろついていたとしたら、たちどころにNさ
んのお宅に連絡が入ることだろう。常連の大好き仲間の多くは、どこんちの子はどんな好み
で、どんなことが嫌いかまで、熟知している。だから、よそんちの子でも、悪いことをしてい
れば叱るし、良いことをすれば誉めてやる。ほんのちよつと昔は、人間の子供に対しても、世
の中の大人はそのような対処の仕方をしていたと思うのだけれど、最近では、悪戯をする子供に
向かって、「そんなことすると、誰々さんに怒られますよ。」なんて、自分で叱れない親が目
に入る。そんな人は、間違ってもワンちゃんを飼って欲しくないのだが……。

公園の常連さんになるほどの犬好きは、その点、なかなか手厳しい。手近な所でオトイレ散
歩に連れ出すだけで、公園に顔を見せないと、

「〇〇さんち、お散歩が大変だから、保健所へ渡しちゃったって、話になってますよ。」

なんて、物騒な冗談も飛び出すから、どうしても公園でのお散歩を欠席しなければならぬ日
は、あらかじめ欠席の申告を必要とするけれど、誰かに用事のあるときも、

「〇〇さんのご主人、今日明日はどこに出張で、奥さんは運転できないから、その間は
近くの広場でお散歩です。」と明確な答えが返ってくる。

たまには、反面教師みたいな人も、紛れ込んでくるけれど、いろんな人や、いろんな種類のお仲間たちと接する機会を持つことは、それが常識的なものであるかぎり、ワンちゃんたちにとって、貴重な経験となり、よい影響をもたらすはずである。とかくに、犬好き仲間は、ありがたい。

ともかくにも、「チヨクラブしょーた」の冒険は、幸運に恵まれた、数少ない例と言えるだろう。

後で連絡の取れた第一発見者は、保護センターに送られて処理なんてことにならないよう、警察でしっかり捜査をしてくれるように申し入れるとともに、ご自分も数時間、交番で飼い主が現れるのを待っていたそうである。ドッグフードもスーパで買いこんで与えている。その後、交番に繋がれている「しょーた」を勤め帰りに見つけて、Tさんに知らせてきた第二発見者も、落ち着かなくて、再び交番へ足を運んでいる。

「ラブラドールの迷子なんて悲しい話、聞きたくないわ。」
と言いながら、とりあえずの落ち着き先を探して、飛び出して来たT夫人。しょーたは、ラブを愛する人々に恵まれた。

今の世の中、都会で犬の独り歩きは、交通事故に遭ったり、保護センターに送られたり、危険だらけの大冒険である。

なんで「しよーた」は、迷い出たか？

「可愛がられているラブラドールは、絶対に家出しない。」

ラブラドールを愛する家族の一員として暮らしている人に、反論を唱える人はないだろう。もしいるとすれば、その人が気づいていないだけで、ストレスを与えている何らかの理由があるはずである。ラブちゃんたちは、こちらが考えている以上に、デリケートな神経で人間との係わりを維持しようと望んでいる。じっくり思いを巡らしてみたいものでもある。

後日、引き取りに来た飼い主が、関係した全員に、しっかりお灸をすえられたことは、言うまでもない。

「えーっ！ フィラリヤのこと、知らないんですか！ そりゃ、とんでもない！！」

予防薬のこと、ドックフードのこと、お散歩のこと、シャンプーのこと、家の中においてやること等等…… e t c .

お仕事・ご家族・お年寄り・散歩の時間がとれなくて……。しよーたの姿が見えなくなっても、飼い主はその日なんらの行動もおこしてはいなかった。月曜日になって保健所で鑑札番号を調べたT夫人と警察からの通報で連絡が取れたのである。

しよーた君は、可愛がってくれたN夫人の袖口をくわえて離さない。この三日間、愛してくれた人々の周りを回って鼻先を寄せる。

「お宅で、できますか？ できないのでしたら私が引き取ってもよろしいんですよ。」
ラブラドールの迷子と聞いて、駆け付けて来たTさんのお友達の一言は、しよーたの身を案じる、愛情からの言葉だが、飼い主にとっては厳しいひとことであつたろう。そう感じて貰わなくては困るのだが……。

「そうですか。やっぱり七歳ですか。犬の寿命は永くなつたとは言つても、大型犬は精々十五年、短い残りの年月を、楽しく過ごさせてやってくださいね。」

くれぐれも念をおされて、「チヨコラブしよーた」は、車に乗り込み、帰っていった。

じぶんちの車より、Tさんとふたりの乗ってきた車に乗りたそうな、心残りの風情を見せながら……。

お外におかれていたしよーた君は、家の中での生活に慣れていないから、最初の夜はお部屋の中で粗相もたっぷりして、絨毯を汚してしまつたけれど、だからといってすぐ外に追い出さず、教え諭すNさんの意を察して、三日目には一度も粗相をしなくなつていた。愛情のこもつたしつけは、効果も速く表れるものである。

迷子の「チヨコラブしよーた」が、それだけ愛されたのも、「しよーた」が一通りの、エチケツトを心得た子であつたことが理由の一つになつている。

「人間と暮らしていた犬は、よく言うことをきくから、実験動物に使うのに最適だ。」

なんて、とんでもない輩もいるけれど、そんな輩のことは論外である。

良い奴は、愛される。どこの世界でも同じであろう。運の善し悪しがあることも、また同じ。もしも、無知な飼い主がいて、必要なつけやエチケットを適切に教えて貰えなかった子がいれば、運の悪いかわいそうな子ということになる。

愛犬を不運な子にしないために、飼い主は努力を惜しむべからずである。

しよーた君を見送るNさんの目には、涙が溢れていた。再会を喜ぶはずの飼い主の目には、それがなかったのに……。

家出するはずのないラブラドルの家出には、それなりの理由が必ずある。

Nさんのもとにいた方が幸せそうな、しよーた君。ごめん。われわれの捜索活動は……
しまったかな？